

## 論 文

## イリテーション (Irritation) について

春 日 淳 一

## 要 約

本稿はルーマンの後期の著作に登場する新概念のひとつ「イリテーション」をとりあげ、その意味を明確にしようとするところみである。まず、ルーマン理論の解説書等に手がかりを求めたのち、イリテーション概念を主題にした原典のいくつかにあたってみた。この概念自体のまとまった理論的説明は見いだせなかったが、時代状況とかかわらせた「イリテーションと価値」と題する論文が含蓄に富んでいるので、その内容を中心に関連概念を含めて解説した。「イリテーション」もまた、ルーマンのシステム論的思考法の枠組みにしっかり位置づけて理解することが肝心である、というのが得られた教訓である。

キーワード：イリテーション；構造的連結；機能的分化；社会システム；環境；社会の自己イリテーション；イリテーションによるイリテーション；イリテーション不感受性；倫理；価値

経済学文献季報分類番号：01-13；02-13

## I. 「イリテーション」によるイリテーション

1984年に出版された『社会システム』(Luhmann [11])は、英訳版の序文で E. M. Knodt が社会理論における「オートポイエティック・ターン」を画すると評したように、ルーマンの代表作のひとつであり、一時は「主著」と呼ばれていた。けれども、のちに出た『社会の社会』でルーマン自身は「社会の理論については当初から、3部構成となるはずの出版物が考えられていた。その3部とは、システム論的な序論の章、全体社会システムの提示、そして第3部として社会の主要機能システムの提示、である。…1984年に私は〔序論の章〕を1冊の書物の形で『社会システム：一般理論要綱』と題して出版することができた」([16] S.11)と述べており、『社会システム』は大きな全体構想の序論という位置づけになっている。「序論」のあと1988年の『社会の経済』から「社会の主要機能システムの提示」が開始され、1997年の『社会の社会』による「全体社会システムの提示」をもって辛くも生前に全体構想は完結したわけである。

「序論」公刊以後13年、ルーマンは自らの理論に磨きをかけ、『社会システム』には登場し

ない概念を積極的に導入する。そうした新概念のひとつで、近頃なぜか筆者の心に引っ掛かって離れないのが「イリテーション」(Irritation)である。この語は1990年の『社会の学問』([13])あたりから登場し、1995年以降本格的に使われるようになるのだが、あちこち頻出するわりには概念自体の明確な説明が見あたらない。Irritationが「イライラした状態」あるいは「ヒリヒリ刺激された状態」を意味することから、筆者は現代社会の様相を描き出すのに格好の概念ではないかと早合点して彼の用例を検討してみたのだが、どうもいまひとつ分からないまま少々<sup>イライラ</sup>irritiertな状態に陥っていた。以下の考察はこのイライラ状態から抜け出そうとするところみである。

## II. イリテーション概念の検索

上でイリテーション概念自体の明確な説明が見あたらないといったが、筆者の不勉強ゆえに見落としているだけかもしれない。そこで念のため、手元の文献で誰か他の人が見つけていないか調べてみた。具体的には『社会システム』の刊行年である1984年以降に出たルーマン理論の解説書や辞典類([1]～[6], [9], [10], [18])で目次・項目・索引に“Irritation”の記載があるものを探してみた。増補版等を含めて9タイトル15冊を検索した結果、次の4タイトルが該当した。

- ①クニール/ナセヒ『ニクラス・ルーマンの社会システム理論：入門』([9])では社会システムと意識(心的)システムの構造的連結にふれた個所で「コミュニケーションは社会システムのコミュニケーション特有の作動において、絶えず意識システムによってイライラさせられたり、刺激(reizen)されたり、妨害(stören)されたりする」と述べたあと、脚注で「イリテーションは直接的なやり方で環境からシステムへ持ち込まれるのではなく、厳密に言えばシステム自身が自らをイライラさせるのである」として、ルーマンの『社会の学問』の記述を引用する(S.70-71)。すなわち「イリテーションは、不意打ち(Überraschung)や妨害(Störung)やあてはずれ(Enttäuschung)などと同じく、つねにシステム固有の状態を指し、システムの環境にはそれに対応するものはない。言いかえると環境はシステムのイリテーションの源泉となるべく、自らはイライラ状態にあってはならないのである。構造形成的予期という条件のもとでのみイリテーションは現われるのであり、システムのオートポイエシスの継続に問題を生じさせるかぎりでのみイリテーションはイリテーションたりうるのである」([13] S.40, 傍点〔原文ではイタリック〕は原著者ルーマンによる)。

クニール/ナセヒの本でもう1か所「イリテーション」が出てくるのは、ルーマンの『法の社会学的観察』([12])からの短い引用の中であり([9] S.190)、ここでは1986年

時点ですでにルーマンがこの語を用いていたこと、またこの語と「ノイズ」概念との間に親近性があるらしいことが分かるが、『法の社会学的観察』にイリテーション概念の掘り下げた説明があるわけではない。

いずれにせよ、クニール／ナセヒは比較的早い時期にイリテーション概念の重要性に気づいていたと思われるものの、見たとおり十分な説明を与えているとはいえない。

- ② クラウゼの『ルーマン辞典』([10])では1996年の初版から「イリテーション」という項目をたてている。すなわち「イリテーションは情報とは区別されるべきである。イリテーションは、なるほどシステムによって知覚されるがシステム固有の作動上のコードにてらせばまだ情報として特定化されていない雑音(ノイズ)のレベルでシステムの環境に存在するものであり、情報としての価値をもちうるばあいもそうでないばあいもある」(S.114)。

その後、版を重ねるごとに説明はくわしくなり、2005年の第4版では次のように拡充されている。すなわち「イリテーションは情報とは区別されるべきである。イリテーションは、なるほどシステムによって知覚されるがシステム固有の作動上のコードにてらせばまだ情報として特定化されていない雑音(ノイズ)のレベルでオートポイエティックなシステムの環境に存在するものであり、構造的連結によって情報としての価値をもちうるばあいもそうでないばあいもある。したがってイリテーションは、システム間関係の領域にある未だ定義されざる不意打ちであり、いずれにせよシステム固有の構成物である。そしてイリテーションというときにはつねに、イリテーションに誘発されたシステムの自己イリテーションも含まれる。

機能的分化は全体社会の自己イリテーションを高め、自己情報のための体系的形式の形成をたとえば社会運動というかたちで、また既知の問題を処理するための体系的形式の形成をたとえば社会的支援というかたちで、それぞれ誘発する。自らつくり出したイリテーションへの各自特有の反応がこうしたシステムを可能にするのだが、しかしこの反応は形成された形式相互の調整役をになうことはできない」(4. Aufl., S.169-170)。

また第4版ではあらたにルーマンの著作の参照ページが示された。該当著作を年代の古いものから並べれば、『社会の学問』(1990)、「イリテーション論：逸脱か新奇さか？」(『社会構造とゼマンティック』第4巻所収：1995)、『マスメディアのリアリティ』(1995)、「見通せないところで動く：高度発展社会の変容動態」(R. グロスマンほか編『組織の変容：マネジメントとコンサルティング』所収：1995)、『社会の社会』(1997)、『システム理論入門』(2002)となる。

検索した文献の中では最もくわしいとはいえ、クラウゼの説明は必ずしも分かりやすいものではない。とくに第2版以降つけ加えられた部分(「したがって…」以下末尾まで)

は、これだけ読んで理解できる人がいるだろうか。やはりルーマンの原典を見るしかない  
と覚悟を決める人が多いのではないか。その意味では第4版の文献指示は親切である。

- ③ M. ベルクハウス『やさしいルーマン：システム理論入門』([2])は著者の専門領域であるマスメディアに重点を置きながらルーマン理論を文字通りやさしく解説したもので、筆者(春日)が読んだ解説書のなかでは最も分かりやすく、これなら初学者でも読み通せるのではないかとの印象をもった。ルーマンのマスメディア関連文献といえばまず『マスメディアのリアリティ』([15])があげられ、そこではイリテーションがキーワードのひとつになっているのであるから、当然予想されるようにベルクハウスの本でもこの概念の扱いは大きく、「マスメディアのイリテーション創出」という1節をもうけてルーマンの議論を手ぎわよく紹介している。ベルクハウスによる要約をさらに2点にまとめると次のようになろう。

(1) マスメディアがあまたの情報の中から好んで取り上げる(=選び取る)のは、新しいもの(時間次元)、逸脱したもの(社会的次元)、量的に表わされるもの(事象次元)であり、こうした情報選別を通じてマスメディアは、現状があるべき姿と違うことを印象づけようとする。このマスメディア特有の情報選別は全体社会およびその機能的部分システムにとってイリテーションとして作用し、全体社会はたえず革新ないし改革へと自らをあり立てるようになる。

(2) より根本的には、マスメディアはたえず情報を非情報に変えることによってイリテーションを生み出す。すなわち、情報はいったん伝えられると情報価値を失って非情報に転化するので、そこにたえず情報欠乏状態が作りだされ、全体社会に新たな情報への渴望、言いかえるとイリテーション、が生じるのである。

『マスメディアのリアリティ』は、イリテーション概念そのもののまとまった説明を含んではいないが、イリテーションの顕著な具体例を示している点でこの概念の理解を助けてくれる。

- ④ J. ディークマン『ルーマン教科書』([3])は、理論の解説、項目を絞った用語集(Irritation はあがっていない)、主要著作の内容紹介と関連文献指示、の3部構成をとっており、イリテーションないしその系列語は理論解説の部にマスメディア論とのかかわりで(Irritierbarkeit)、また著作紹介の部に『社会の社会』第4章X節「イリテーションと価値」にふれるさい、それぞれ登場する。前者は先のベルクハウスとは違って、とくにイリテーション概念に注目したものではなく、『マスメディアのリアリティ』の解説中にたまたま出てきたというおもむきである。後者は『社会の社会』を目次に沿って紹介するなかで必然的に出てきたものであり、同書の当該節はこのあとくわしく検討する。

以上の簡単な検索からイリテーション概念の説明の決定版といえるものを導き出すのはむしろかしいが、何が肝心なのかはある程度見えてくる。最大のポイントはおそらく、イリテーションがシステムとりわけオートポイエティックな社会システム（全体社会システムとその機能的部分システム）との関連で論じられているということであろう。ある機能システムに視点を定めると、システムの外側という意味での環境は、「機能システムでないもの」、「他の機能システム」、「当の機能システム自身=環境とみなされた自分自身」のいわば3層に区分される。環境が3層区分されるのであれば、たんにイリテーションのきっかけは環境で生まれるというだけでなく、環境のどの層で生まれるのかまで特定化して考察する必要がある。日常的になじみ深いのは、機能システムでない環境（たとえば自然環境）でイリテーションのきっかけが生まれるケースであるが、ルーマンの主要な関心は社会の機能分化に伴って生じた機能システム間の相互イリテーションなど、よりソフィスティケートされたケースである。そういうケースでも、イリテーションの淵源をたどれば機能システムでない環境に行き着くばあいがあるから（ただしのちにふれるように、もはや淵源をたどれなくなった「社会の自己イリテーション」や、はじめから淵源をもたない「イリテーションによるイリテーション」もありうる）、なじみ深いケースを軽視してよいわけではないが、以下ではさしあたりルーマンにならって、システム論的に見たときイリテーションがどのように位置づけられるかに焦点を合わせよう。このときおのずと浮かび上がるのが、以前論じたことのある機能システム間の構造的連結（strukturelle Kopplung）という考え方である。

### Ⅲ. イリテーションと構造的連結

イリテーションについて論じるとき、ルーマンの社会システム論の復習を兼ねて、まずはコミュニケーションとイリテーションの違いを再確認することからはじめたい。

重要なのは「機能システム相互間のコミュニケーションはありえない」という理論的前提である。そもそもコミュニケーションは、社会システム（全体社会システムとその機能的部分システム）の要素であり同時に境界でもあるという二重の性格を負わされているので、全体社会の外側にコミュニケーションがこぼれ落ちていたり、ある機能システムがそれ固有のメディア（経済システムであれば貨幣）を用いるコミュニケーションを他の機能システムとのあいだで行なったりという事態は起こりえない。全体社会はあらゆるコミュニケーションを、各機能システムは固有メディアによるコミュニケーションを、それぞれ残らず自らの内に取り込んでいるがゆえに、全体社会と環境のあいだのコミュニケーションとか機能システム相互間のコミュニケーションといった所属の定まらないコミュニケーションの余地はな

く、その意味で各システムはコミュニケーション的に閉じており、同時にコミュニケーションによって閉じられている。

だからといって、社会システムと環境のあいだに、したがってまた機能システム相互間に、なんの関係もないということではもちろんない。ルーマンはコミュニケーション的に閉じたシステムと環境のあいだのつながりを少なくとも三つの用語で表現してきた。「共鳴」(Resonanz)、「相互浸透」(Interpenetration)、「構造的連結」がそれであるが、これらは併用されるのではなく、むしろあとの用語が前の用語に取って代わるという用語進化を示している<sup>1)</sup>、ここでは最新版の「構造的連結」をとりあげることにしよう。

構造的連結について筆者は先に「経済システムにおける自己準拠と構造的連結」と題する論文([8])で考察済みであるから、くわしくはそちらに譲り、イリテーションと関連するかぎりでの要点を記せば以下のようなものである。すなわち、イリテーションは構造的連結の媒介者であり、コミュニケーションにおけるメディアに相当する役割を演じるものである。システム内部では貨幣・権力・真理等々の固有メディアを用いてコミュニケーションが行なわれると同時にシステム境界がそのつど確認される(=閉鎖性)一方、システム間にはイリテーションを通じて互いの構造変化を促す連結関係がしばしば制度的につくりあげられる(=開放性)。一例をあげるなら、政治システムと経済システムの構造的連結は予算や租税や中央銀行の制度のもと、互いの発するイリテーションのきっかけが相手方の固有二元図式(経済であれば支払い/不支払い、政治であれば権力所持/権力不所持)に乗るかたちに変換(翻訳)されることで実現する。たとえば景気の回復は経済システムにおける支払い作動(=経済的コミュニケーション)の活発化を意味するが、与えられた租税制度のもとで政府に税収の増加をもたらす。この増収分をどのように使うかは政治的に決められ、その決定の適否は現政権の強化または弱体化につながりうる。これは経済システムで生まれた景気回復というきっかけが政治システムにとってのイリテーションとなるケースである。逆に、政権の不安定化が外国企業の撤退を招き国内経済が不況に陥るなどというのは、政治システムに発して経済システムのイリテーションとなるケースである。

他のシステムで生まれたイリテーションのきっかけが、あるシステムにとってシステム間の構造的連結を媒介するようなイリテーションとなるか否かは、そのきっかけが当該システム固有の二元図式に翻訳されるか否かにかかっているが、さらにイリテーションを与えられたシステムが構造を変えるか否かは、そのシステムがイリテーションから学習するか否かにかかっている。たとえば上の例で、税収増の用途を誤って批判を浴びた政府が、より慎重な用途決定のために新たに審議会を設けたとすれば、学習による構造変化のケースとなる。いずれにせよ、「構造的連結」で考えられているシステムと環境の関係(ここにはシステム

間関係も含まれるが) は、状況次第でさまざまなケースが分岐するコンティンジェントな関係であり、システム的环境がもろにシステムに干渉しその構造を力づくで変えてしまうとといった直接的かつ単純な関係ではない。この点で構造的連結という概念は、F. A. ハイエクが批判する「コンストラクティヴィズム設計主義」の野望をくじくものともなっている。

以上、構造的連結とかかわる話はイリテーション論のいわば基礎知識であり、これを頭に仕込んだうえでいよいよイリテーションを主題にした論文と格闘せねばならない。「格闘」といったのは、該当する論文が常にも増して難物だったからである。

#### IV. イリテーションと価値

イリテーションを主題にしたルーマンの論文は、『社会構造とゼマンティック』第4巻所収の「イリテーション論：逸脱か新奇さか？」([14])、および『社会の社会』所収の「イリテーションと価値」([16])のふたつであるが、前者は46ページにおよぶイリテーション概念の詳細な歴史分析、文字通り「ゼマンティック」であり<sup>2)</sup>、残念ながら筆者の期待に込めてイリテーション論の有効性ないしおもしろさを実感させてくれる内容ではなかった。いやむしろ、内容が筆者の読解能力を越えており、有効性やおもしろさを実感するレベルには遂に到達しえなかった、というべきであろう。この論文の真価が他の有能な読み手によって見いだされることを願っている。後者「イリテーションと価値」も筆者にとって相当な難物で途中で投げ出したくなったのだが、時代状況と切り結ぶその内容がルーマン晩年の社会観を映し出しているように思えて捨てるに捨てられず、なんとか読み通すこととなった。以下は同論文の要点を筆者の解読にもとづいて敷衍したものである。ありうべき誤読・誤解のご指摘・ご叱正をお願いする次第である。

##### IV-1 機能的分化とイリテーション

1997年刊行の2分冊の大著『社会の社会』は、長くない余命を予感しつつ書き上げた生前のルーマンの「社会の理論」の最終報告というべきものである<sup>3)</sup>。『社会の社会』の中でイリテーションは全体社会の分化にかかわるものとしてとりあげられる。全体社会が環節的分化 (segmentäre Differenzierung) や成層的分化 (stratifikatorische Differenzierung) の状態を脱し機能的分化へ移行するとともに、「イリテーションに対する社会の感受性、すなわち環境変化に迅速に反応する能力、は高まるが、同時にその代償として、諸イリテーション間の調整は大幅に断念せざるをえない」([16] S.789)。機能分化社会は機能に専門特化した部分 (下位) システムを発達させるとともに、統治センター、すなわち社会全体を見通して制

御や調整を行なう中枢、を失うからである。そして、イリテーションが調整されていないことは、それ自体が社会にとってのさらなるイリテーションとなりうる。イリテーションは機能システムの作動に影響を与えるかもしれないし、与えないかもしれない。イリテーションは繰り返されることによって機能システムの構造を変えるかもしれないし、1回限りのものとして忘れられ構造に痕跡を残さないかもしれない(S.790)。いずれにせよイリテーションはシステムを特定することではじめて問題となりうる概念であり、(システムと区別された)環境へのイリテーションという言い方はできない。たとえば「〈汚染〉とは、人間の判断が創り出したものであり、オゾン層の破れや沈没した原子力潜水艦や‘瀕死の’森は自分自身のことでイライラしているわけではない。環境はそれがあるままのものである」(S.792)。

社会システムのばあい、意味論のレベルではイリテーションは当該システムにとっての問題とみなされるか、さもなくば放置されるか、いずれの反応もありうるのであるが、実際には上述のイリテーション感受性の高まりがシステムの能力向上とからみあって、システムが次々と新しいイリテーションを追い求める結果(社会の自己イリテーション、最終的にはイリテーションによるイリテーション)、自らの手に余る問題を抱え込むことになる(S.793-794)。ルーマンの叙述を補ってより具体的に述べるなら、たとえば技術進歩によってインターネット取引や電子マネーといった形態が登場し経済システムの能力(作動効率)が向上する一方で、そうした技術の採用が経済に対して新たなイリテーションの発生源となりうる。システム障害による部分的作動停止・遅延(金融機関・証券取引所等)、誤操作による予期せざる損失の発生(株取引等)、システムの悪用(ネット上の詐欺)など事例は容易にあげることができる。これらの事例がまずもって経済にとってのイリテーションになることは確かであり、イリテーション(=問題)として受け止めずに放置すれば経済システムの存立は早晚あやうくなる。しかし、イリテーションとして受け止めるからといって、当該システムでそのイリテーションを解消ないし除去できるとはかぎらない。先に述べたように、機能分化社会ではイリテーションの受け皿はふえるのだが、その代償としてイリテーションの解消ないし除去を一挙全面的にやってくれる部局を失うのである。経済・法・政治・教育・学術等々の機能的部分システムはせいぜい問題の部分的解決策を編み出しうるにすぎない。むしろ起こりそうなのは、受け皿としての部分システムにはいつてくるイリテーションが急増して部分的解決策を考案する能力が追いつかないという事態である。現状はまさにこの事態に該当するというのがルーマンの診断であり、上記事例を見ても診断に誤りはなさそうである。



#### IV-2 イリテーションの部分的処理

この診断に続くルーマンの議論をたどる前に、問題としてのイリテーションを機能システムによって部分的に解決するとは具体的にどのようなことなのか、説明を加えておこう。

経済システムでいえば、二酸化炭素による汚染に「排出権取引」という貨幣的処理法が案出され実行に移されているのは、この部分的解決の顕著な一例である。いわゆる「環境問題」ないし「環境汚染」が広くイリテーションとして経済システムによって受け止められるようになったのは、それほど古いことではない。おそらく、大学の経済学部「環境経済学」という科目が設置されるようになる少し前あたりではなかろうか。人間の経済活動（生産や消費）が環境を破壊しつつあり社会にとって放置できない問題であるとの認識が広まる中、その解決策を求める期待圧力も高まっていった。機能分化社会の本質を理解していない人びとは、（いまやありえない）一挙全面解決策の存在を信じ、現実に提案される部分解決策への不満を絶えず抱いたはずである。経済活動そのものと機能的部分システムとしての経済の区別が念頭にない彼らは、元凶と目された経済活動に一挙全面解決を迫り「くたばれGNP」などと叫んだのである（当時すなわち1960年代後半は筆者も共鳴者だったことを白状しておこう）。その間、支払いのオートポイエティック・システムである経済システムは大部分の人の目には見えていないので、さしあたり殴られ役は「経済活動」にまかせて「知らぬ顔の半兵衛」をきめこむことができた。いくらイリテーションが与えられようと、経済システムはイリテーションが経済システム固有の「言語」つまり「支払い／不支払い」の二元図式に翻訳されない以上、対処のしようがないからである。しかし環境問題は政治システム、法システム、学術システムなどへのイリテーションともなっていたから、政治・学術の両システムで問題を法的・経済的に処理する実行可能な方策が考案され、たとえば種々の規制や裁判や経済的取引を通して部分的な問題解決がはかられるようになったのである。「排出権取引」はそうした部分的解決策のひとつであり、実行に至るまでには少なくとも経済・政治・法・学術の4機能システムのあいだの相互イリテーション（したがってまた構造的連結）とそれにもとづくいくつかの（すべてのとはかぎらない）機能システムの構造変化があったはずである。こうした経緯から分かるように、「排出権取引」は経済システムにもなえるものとして諸々の機能システムが構造的連結のもとで苦心して(?) 作りあげた一方策にとどまり、それにCO<sub>2</sub>問題の全面的解決を期待するのはまったくの誤りである。

#### IV-3 時代状況の分析

機能システムによるイリテーションの部分的処理についてはひとまず終え、イリテーション急増の問題に話を戻そう。ルーマンによれば過去数十年の間に、全体社会システムの環境

に由来するイリテーションのきっかけが劇的に増加したという。そしてこのことには少なくとも次の三点がかかわっている（[16] S.795）。

- (1) 技術と人口過剰によって引き起こされた人間以外の環境の生態学的問題
- (2) 人口増加それ自体、すなわち人間身体の急激な増加およびその統制不能な移動
- (3) 各人の期待の個別化ないし“わがままな”期待形成の進展（これは期待がますます幸福と自己実現に照準を合わせるようになることを意味する）

人間も全体社会システムの環境に属するという点に留意するなら、(2)と(3)は人間そのものが環境として全体社会システムにとってのイリテーション増大に荷担しているケースと理解できよう。機能分化社会へと進化することで、全体社会は環境からのイリテーションを受け止めるいわばパラボラ・アンテナとして多数の機能的部分（下位）システムを分化させたが、その機能分化が直接・間接に引き金となって(1)(2)(3)といった事態がもちあがり、膨大なイリテーションが生み出される結果、各機能システムは処理能力を越えるイリテーションをかかえて立ち往生する。全体社会は自らが作り出した環境変化に押しつぶされそうな気配である。これがルーマンの現状把握の出発点であった。

では、この窮地を脱するためのどんな動きが全体社会に見られるのであろうか。ルーマンの観察はシニカルである。すなわち、イリテーションを受け止めたうえでそれを解消ないし除去するのではなく、そもそもイリテーションをイリテーションとして受け止めないという不感受性（Unirritierbarkeit）の表明が目立つというのである（S.797）。要するに、問題を正面から受け止めないで逃げているわけである。例証としてあげられているのは、(a) 機能システムとは異なる境界が（再）設定されるケース、(b) 倫理上の原則や放棄できない価値への固執に対処するケース、である。

(a) 機能システムとは異なる境界の（再）設定は、具体的には「人種融和をかかげる国の中での人種上の区別の復活」や「ふつう“世俗化した”社会として描かれる世界社会における宗教的原理主義の再興」に見られ、いずれも隔離プロセスないし少数派による包摂／排除関係を生ぜしめ、機能システムによらないアイデンティティ確信の場を提供する。このこととイリテーションへの不感受性とはどうつながるのであろうか。例によってルーマンの説明だけでは分かりにくいので、筆者なりにかみくだいてみよう。すなわち、個々人からみると、自分の周りに人があふれ（人口増加）、しかも今までめったに出会うことのなかった他人種・外国人が日常生活の場に「侵入」してくる（人口移動）。一方、個々人は自らの個人的幸福、アイデンティティあるいは自己実現をますます強く望むようになるが、これは要求水準の引き上げにほかならないから、望みを達成するのは容易ではない。しかも他人種・外国人も含めて同じ望みをいだく人間がひしめいているのだから、目標達成はますますむずかし

いものとなる。これが個々人にとってイリテーション (イライラ) にならずにすむはずがない。個々人は全体社会システムの要素であるコミュニケーションのにない手であるから、個々人がこのようにイライラを募らせている状況を全体社会システムのレベルで眺めると「社会の自己イリテーション」(Selbstirritation der Gesellschaft : S.795) と映じるであろう。コミュニケーションのにない手<sup>なんびと</sup>としては何人も区別されないのであるから、誰もがイライラの解消を機能的部分システムに求める資格をもつ。しかし機能システムのほうは、押し寄せる人びとのイライラをすべて処理しうるほどの能力はもち合わせていない。こうしてイライラはさらに増幅する (イリテーションによるイリテーション)。機能システムに頼れないとなれば、ほかによりどころを求めるしかない。問題の一半は人間が多すぎるところにあるのだから (上記 (2))、まずは競争する人数を減らす必要がある。出てきた答は「区別を設ける」、しかも手っ取り早く「昔の区別を復活させる」であり、具体的には人種上の区別や宗教的原理主義の復活であった。こうして区別の内側に閉じこもれば、とりあえず外側は見なくてもすみイリテーションの源泉にはならない、というわけである。

もつとも、イリテーション締め出し (=イリテーション不感受性の獲得) が平和裡に実現する保証はない。区別に伴う隔離や排除は多くのばあい抵抗を呼び起こすから、イリテーション不感受性を確保しようとする固有領域 (たとえば宗教的原理主義集団) は、しばしば暴力 (というメディア) を用いて外部とコミュニケーションせざるをえなくなる。Ⅲ節で確認したように機能システム間のコミュニケーションは理論上ありえないが、いま問題になっている「固有領域の堅固な境界はけっして機能システムの境界と一致してはいない。〔機能システムの境界とは異なり〕固有領域の境界のばあいには境界を通して表出的なコミュニケーションが行なわれるのである」(S.797 : [ ] 内および傍点は引用者による追加)。個別機能システム内のコミュニケーションと機能システム間の構造的連結によってイリテーションが受け止められ処理されるというのが本来あるべき姿なのに、それが叶わず回避策がとられる結果、暴力によるコミュニケーションが生まれるのである。このコミュニケーションは特定の機能システムに属してはいないが、コミュニケーションであるかぎり全体社会システムに取り込まれざるをえない。

(b) イリテーション不感受性表明のもうひとつのケースに移ろう。倫理上の原則や放棄できない価値に固執するというのは、さしあたり上述の (1) ~ (3) の事態への対応である。たとえば「環境のために、あるいはより公正な全世界的分配のために、〔倫理上の原則として〕習慣化した消費水準の断念を求める」(S.798) といった仮想例を考えよう。これはいわゆる「総論」レベルでは多くの賛同を得られるかもしれないが、「各論」となるととたんに困難に直面する。消費断念という「目標がどのようにして個人の動機づけを経て達成さ

れるべきなのかが分からない」からである。消費断念の意思決定をするのは多くの(あまりにも多くの!)個人である。どこの誰にいつどれだけの消費断念をしてもらうのが社会全体として公正なのか。倫理学にこの答を求めても無理である。「かくして残るのは、全体社会は倫理的要求を満たさないと確認したうえで、この確認をもって納得顔でコミュニケーションを首尾よく進める」(S.798) ことしかない。つまり人びとは各論レベルでこの「倫理上の原則」が破綻せざるをえないと互いに認め合うことで全体社会的視点からの消費断念を免れる一方で、総論レベルではなおこの原則に固執し、環境問題や分配問題への各自のアンガージュマンとして個人的判断でさまざまな程度の消費断念がなされる。そうした個々バラバラの消費断念が環境問題や分配問題(=イリテーション)の全体社会的解決につながる保証はまったくない。問題に対する感傷的反応(Larmoyanz)はあるが、問題の本質的解決への努力を放棄しているという意味で、全体社会はイリテーション不感受性を示しているとルーマンは見る。

全体社会的に処理・調整するのがもはや不可能な持続的イリテーションにさらされ確信喪失に陥った人びとは、倫理にもすがれなくなれば、いったいどうすればよいのだろうか。ここで救世主のごとく現れるのが「価値」である。価値はもともと個人の選好にすぎず、そのようなものと当事者が了解しているかぎり、コミュニケーションを損なうことはない。首相Kが終戦記念日に靖国神社に参拝するのも、彼の個人的選好に発する行為と割り切るなら、外交問題(=外国とのコミュニケーションの困難化)にならずにすむはずである。「価値はコミュニケーションにおいて前提され、また合わせてコミュニケーションされるが、コミュニケーションにさらされる[=コミュニケーションのテーマになる]ことはない。つまりそれはたんに前提として活用されるのであって、主張としてではない。それゆえ、価値を前提として含みつつ進行するコミュニケーションには、価値主張に対して諾、否、あるいは条件付き諾をもって応答する動機が認められない」(S.799:[ ]内は引用者による追加)。しかし、価値が個人的選好にとどまるならば、イリテーションの処理には無力である。それどころか多数の価値の衝突という新たなイリテーション源を生み出す可能性が大である<sup>4)</sup>。価値がイリテーション処理に役立つには、それが何らかの意味で社会的なものになっている必要がある。「錯綜した歴史的意味転位を経たのち19世紀以降、価値概念に社会的な要求が合わせて組み込まれるようになった。[たとえば]女性が平等な扱いを要求するばあい、そこには同時に、平等はひとつの価値であるという前提について議論することなく他の者はこの主張を認めるべきだ、との示唆が含まれている。それゆえここで表出されるのはたんなる選好以上のものなのだが、通常のテンポのコミュニケーションのばあい、それ自体がコミュニケーションのテーマにならないかたちで表出される」(S.799:[ ]内は引用者による追加)。

ここで「平等という価値そのものにはなんら反対するつもりはなく、ただ他のもろもろの観点を合わせて考慮することを求める」者であっても、異議を申し立てることは「あまりにもめんどろであり、個別ケースでは割に合わない」。かくして「人びとは価値を大目に見ることとなる」(S.799)。価値について全体社会的視点から論じることを断念するというのは、先の倫理のばあいと同様、問題の本質的解決への努力の放棄であり、イリテーション不感受性の顕示にほかならない<sup>5)</sup>。

以上、倫理および価値にかんするルーマンの議論を要約すれば次のようになる。すなわち、倫理原則は個人の意味決定レベルにおろす各論段階で、価値は個人の選好というその性格からして社会的調整の段階で、それぞれ行き詰まってしまうがゆえに、両者とも本来は全体社会レベルでのイリテーション処理をにないえないはずである。ところがイリテーションに対して不感受になるという便法を挟み込むことで、「総論としての倫理原則」や「大目に見られた価値」が社会レベルでまかり通るようになる<sup>6)</sup>。これら倫理原則や価値は (a) できりあげた「人種上の区別の復活」や「宗教的原理主義の再興」の動きとともに、機能システムにとってさらなるイリテーション源となる。イリテーションを解消しようとしてかえって新たなイリテーションを生み出してしまふ「イリテーションによるイリテーション」である。

このようにルーマンの観察は辛辣で、上述の動きを「つじつまの合わない観点からする〔イリテーションの〕ゆがんだテーマ化」(S.801:〔 〕内は引用者による追加)と呼ぶほどきびしいものである。ところが、ではいったいどうすればよいのか、氾濫するイリテーションにどう対処すべきなのかという問いに答える段になると、ルーマンにしては珍しく弱気を隠せない。「われわれは、もともと過度のイリテーションを負った機能システムの側に立ち、そこになお唯一の望みをつなぐばあいにのみ、イリテーションを予期構造に変換しようとする機能システムのころみ<sup>ウツァールシャインリッヒ</sup>を折々の環境問題をも解決する見込みありとして評価することができる」(S.801)と、あくまでも機能分化社会の本来的な作動に希望を託すかのようであるが、「そうすることは今日では幾分かの楽観論を含んでいる。いずれにせよ、機能に指向した全体社会分化というこの進化的に生起確率の低い形式がそのまま常態化する可能性には、はっきりと限界が見えている」(S.801)と、機能分化社会の終焉さえ予告している。筆者はかつて「ルーマンが現代社会を語るとき…ペシミスティックな響きは聞こえてこない。彼はつとめてシステムの観察者としての立場を守り、むしろ観察のための道具をあれこれ案出するほうに重きをおいているかのようである」([7] 67頁)と述べたことがあり、この姿勢は最後まで貫かれたと見るのがおそらく正しいであろう。それにもかかわらず、最晩年の『社会の社会』のこの一節を目にしてルーマンの抑えがたいペシミズムが伝わってくるような感

じがした。いやこれは錯覚で、筆者自身のペシミズムがルーマンの言説に反射して返ってきただけなのかもしれない。

## V. 結び

後期ルーマンが多用する「イリテーション」(Irritation)なる語の意味がいまひとつつかめないというイライラした(irritiert)気分を晴らすべく、著作のいくつかを読み直し、また解説書のたぐいに当たってみた結果が以上である。イライラ解消(Abhilfe der Irritation)とまではいかないが、多少緩和されたとはいえるだろう。

考察の過程で改めて気づかされたのはルーマンの徹底したシステム論的思考法である。イリテーションを「イライラ」などと訳すと、ついイライラする主体としての人間が前面に出てきてしまうが、ルーマン理論を理解するうえではそれは間違いのもとである。『マスメディアのリアリティ』第15章冒頭の文章を引くと、「これまで行なってきた考察は、断固として、しかも例外なく、“全体社会”および“マスメディア”というシステム・レファレンスだけを取り上げ、それ以外のすべてはその“環境”へと追いやってきた。それによって、生きている身体としての、そして意識システムとしての個人も考慮の対象からは外されてきた」([15] S.190, 訳158頁：訳文は一部変えてある)とある。この文章を読んで「ルーマン理論では人間がなんらの役割も果たしていない」とか「人間の偉大さがなおざりにされている」と批判するなら、ルーマンの挑発(Irritation)にまんまと乗せられたことになる。「こうした推論をする者は、…理論を理解していないのである。…人間が社会システムの環境だからといって、人間が見失われたわけではなく、市民社会に関する旧来の理論と比較してみると、人間の位置づけが変わるだけなのである」([11] 訳vi頁)。社会システム(全体社会とその機能的部分システム、そしてマスメディアもこれに該当する)から見て環境に属する人間は、それ自身システム(たとえば、意識システム)として社会システムと構造的に連結しているというのがルーマンのとらえ方であり、この構造的連結によって人間は社会システムにいわば「呼び戻される」のである。

「イリテーションは…つねにシステム固有の状態を指し、システムの環境にはそれに対応するものはない。言いかえると環境はシステムのイリテーションの源泉となるべく、自らはイライラ状態にあってはならない」([13] S.40)とすれば、社会システムの環境としての人間は「イライラ状態にあってはならない」はずである。しかしシステム・レファレンスを変えて人間をシステムと見れば、それはそれでイライラ状態になりうる。したがって問題は、それぞれのシステム・レファレンスをとればともにイライラ状態になりうる社会システムと人間が構造的にどのように連結するのかということになる。本稿ではこの問題を論ずるまで

には至らなかったが、肝心なことはシステム・レファレンスの峻別である。この問題にかぎらずルーマン理論にかかわる者はいつでも、システム・レファレンスを混同しないよう細心の注意を払わなければならないのである。

### 注

- 1) ちなみに、『社会の社会』の索引に「共鳴」は見あたらず、「相互浸透」はわずか2か所の指示で『社会システム』時代の用語ないしパーソンズの使用という扱いであるのに対して、「構造的連結」は表題にその語を含む節がふたつあるなど頻出する。
- 2) ルーマンの用語法における「ゼマンティック」の意味は、高橋 [20] 4 - 5 頁を参照。
- 3) 筆者はここで、村上泰亮氏の『反古典の政治経済学』(上・下:中央公論社1992)を想起した。村上氏が存命であれば、ルーマンとの大いなる接点が生まれていたであろうのにと、惜しまれてならない。
- 4) 価値の衝突は、ルーマンがあげたイリテーション増幅要因の(3)、すなわち「各人の期待の個別化ないし“わがままな”期待形成の進展」によって助長されるであろう。
- 5) 格言の「さわらぬ神にたたりなし」や世にいうタブーは、価値についての議論の断念を求める点で、いまとりあげているケースにぴったりあてはまる。印象的な実例としてピーター・シンガー (Peter Singer) の語るところを紹介しておこう。シンガーは『実践の倫理』、『動物の解放』などの著作を通じて、安楽死や人間の生命と動物の生命の比較といった問題に果敢に取り組む哲学者として知られているが、ドイツ語圏の国々で大きな抵抗に遭ったという。彼が「講師として招かれた会議や講義は取り消され、本書 [= 『実践の倫理』] が使用されるドイツの大学での講義はあまりにも頻繁に妨害をうけたので、継続できなくされてしまった」([19] 訳v頁)。そのうえ、彼を講義に招いた教授までもが解雇をねらったキャンペーンの標的にされ、それに対して所属大学当局や同僚からの援護はほぼ無きに等しかった。こうして「今やドイツとオーストリアでは、応用倫理学で仕事をするには相当の勇気を必要とするし、…常勤の職を大学に持たない学者たちは、単に個人的攻撃を受けることだけでなく、学者生活を続ける機会が減少することをも恐れなければならない」([19] 訳416頁) 事態に立ち至った。ナチズムとのかかわりで安楽死(や優生学)にかんする議論がドイツではタブーになっていることを考えれば、シンガーの倫理学説はタブー破り以外の何ものでもないから、議論をさせまいとしたり無関心を装ったりするのは、むしろ当然の反応である。さらに人間の生命と動物の生命の比較は、ドイツに限らず広く浸透した人間の優越性への信念(=価値)ゆえにタブー化しており、これまた議論を封じようとする動きを誘うこと必定である。時の流れとともにタブーにも消長が見られるが、ルーマンのあげた「平等」や、もしかすると「民主主義」も、ある程度タブー化していると言えるのかもしれない。
- 6) 「倫理原則ないし放棄できぬ価値を引き合いに出すケースが日常なことばづかいの中でふえ、実に多種多様な状況において、たとえば政党綱領の作成や最高裁判所の判決、会社定款の公示や法令の準備といったばあいに、書式作成を助ける」([16] S.801)。

### 参考文献

- [1] Baraldi, C., G. Corsi und E. Esposito, *GLU Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Suhrkamp, 1997.
- [2] Berghaus, M., *Luhmann leicht gemacht*, Böhlau, 2003.
- [3] Dieckmann, J., *Luhmann-Lehrbuch*, Wilhelm Fink, 2004.
- [4] Fuchs, P., *Niklas Luhmann-beobachtet*, Westdeutscher Verlag, 1992 (3. Auflage, VS Verlag, 2004).
- [5] Gripp-Hagelstange, H., *Niklas Luhmann: Eine erkenntnistheoretische Einführung*, Wilhelm Fink, 1995.

- [6] Horster, D., *Niklas Luhmann*, C. H. Beck, 1997 (2. Auflage, 2005).
- [7] 春日淳一『経済システム—ルーマン理論から見た経済』文真堂, 1996年.
- [8] ————「経済システムにおける自己準拠と構造的連結」関西大学『経済論集』第49巻第3号, 1999年.
- [9] Kneer, G. und Armin Nassehi, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Wilhelm Fink, 1993.
- [10] Krause, D., *Luhmann-Lexikon*, Ferdinand Enke, 1996 (4. Auflage, Lucius & Lucius, 2005).
- [11] Luhmann, N., *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp, 1984 (佐藤勉監訳『社会システム理論』上・下 恒星社厚生閣, 1993, 1995年).  
〔英訳版〕 *Social Systems* (translated by J. Bednarz with D. Baecker), Stanford University Press, 1995.
- [12] ————, *Die soziologische Beobachtung des Rechts*, Nomos, 1986 (土方透訳『法の社会学的観察』ミネルヴァ書房, 2000年).
- [13] ————, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1990.
- [14] ————, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Band 4, Suhrkamp, 1995.
- [15] ————, *Die Realität der Massenmedien*, 2., erweiterte Auflage, Westdeutscher Verlag, 1996 (林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社, 2005年).
- [16] ————, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1997.
- [17] ————, *Einführung in die Systemtheorie*, Carl-Auer, 2002.
- [18] Reese-Schäfer, W., *Luhmann zur Einführung*, Junius, 1992 (5. Auflage, *Niklas Luhmann zur Einführung*, 2005).
- [19] Singer, P., *Practical Ethics*, 2. Edition, Cambridge University Press, 1993 (山内友三郎・塚崎智監訳『実践の倫理』〔新版〕昭和堂, 1999年).
- [20] 高橋徹『意味の歴史—社会学—ルーマンの近代ゼマンティック論』世界思想社, 2002年.